

令和8年度 全国学力・学習状況調査【質問紙調査】

羽島市の結果及び今後に向けた指導について

※紙面の都合上、小学校及び義務教育学校（前期課程）を小学校、中学校及び義務教育学校（後期課程）を中学校と表記している。

1 子どもたち自身のことについて

○小学校・中学校ともに、「自分にはよいところがある」と回答した児童生徒の割合が前年度より増加している。授業や生活場面において、子どもの良さに目を向け、価値付ける指導を大切にしてきたことによって、自己肯定感が高まっていると考える。

○小学校においては「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童の割合が前年よりも増加した。外部講師を招いたキャリア教育の授業を積極的に行っている成果だと考える。

△中学校において、「将来の夢や希望をもっている」と考える生徒の割合が減少している。

△「いじめはどんな理由があってもいけない」という設問に対して、否定的な回答をする児童生徒が一部見られる。

【今後に向けて】

- ・学校生活や道徳の授業において、多様な価値を認め合う場を位置付けていくことで、自己肯定感をさらに醸成していく。
- ・人権教育の取り組みの成果が意識の向上につながっているため、「いじめを許さないこと」を前提とした指導をより一層充実していく。
- ・先が不透明な社会情勢の中でも、将来に対しての希望がもてるような、職場体験や職業講話を積極的に展開していく。

2 学校の学習での ICT 機器の活用について

○ICT 機器の活用については、小学校・中学校ともに高く、活用スキルの向上が見られる。

【今後に向けて】

- ・積極的に ICT 機器を活用して授業に取り組むことで、子どもの活用スキルの向上を目指すとともに、教職員の ICT の活用スキルを高め、授業内での効果的な利活用を目指すための研修等を推進していく。

3 学校生活とのかかわりについて

○小学校・中学校ともに「学校に行くのが楽しい」と回答した児童生徒の割合に増加傾向が見られる。また「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と回答した児童生徒の割合が全国平均よりも高いことから、主体的で対話的な深い学びの実現に向けた授業改善の成果が見られ、「授業が楽しい」「学校に行くのが楽しい」という意識につながっていると考える。

△小学校において「友達関係に満足している」と回答した児童の割合が減少した。

【今後に向けて】

- ・子どもの主体性を大切に、目的をもった協働的な学びの実現も含めた授業改善を行うことで、さらに学校に行くのが楽しいと思える児童生徒を増やしていく。
- ・小学校段階から、ソーシャルスキルトレーニングを通して、多様な価値観に触れたり受容したりすることができる活動を充実させる。

4 子どもたちと地域や家庭生活とのかかわりについて

○小学校・中学校ともに「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」と回答した児童生徒の割合が前年度より増加した。総合的な学習の時間の見直しにより、地域との関わりが増えている結果だと考える。

【今後に向けて】

- ・これからも総合的な学習の時間を通して、地域への校外学習を積極的に取り入れたり、学校内外の多様な人材を生かした出前講座を設定したりするなど、児童生徒と地域のつながりを大切にしたカリキュラム編成を推進していく。

令和 8 年度【国語】

■小学校及び義務教育学校（前期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均を下回っている。
- ・「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」に関わるどの設問に対しても総じて全国平均を下回っているが、特に「読むこと」に関わる設問に課題が見られた。
- ・「読むこと」について、文章の内容を理解し、その内容を別の事例に転化する問題が多く、多くの学校で全国平均を大きく下回った。
⇒文章全体の構成を捉えて要旨を把握する指導や、目的に応じて文章と図表などを結び付けて読み取るなどして必要な情報を見つける指導の充実が必要である。
- ・総じて全国平均よりも下回っている中で、「資料を活用して自分の考えが伝わるように表現を工夫する」問題は、多くの学校で平均を上回った。
⇒日々の授業の中で多様な他者との関り、資料を活用して自己表現することを大切にして取り組んでいる成果が見られたため、これからも対話的な学びの充実を図っていく。

■中学校及び義務教育学校（後期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均をやや下回っている。
- ・「情報の扱い方」に関わる設問は、他の設問よりも比較的正答率が高い。
- ・「必要に応じて質問しながら話の内容を捉えることができるか」をみる設問は全国平均より高い。
⇒小学校同様、対話的な学びの充実を図った授業改善の成果が見られた。
- ・「書くこと」全般に関わる設問に課題がある。
⇒目的に応じて文章の構成を見直し、改善点を踏まえて書き改めるなどする学習活動や指導の充実が必要である。
- ・「自分の考えを書く」設問に、弱さがみられる。
⇒授業の中で言葉を発して考えを伝え合うことができるが、それを文章として表現する力に弱さがあるため、文字でアウトプットしていくことも大切にした授業改善を図る。

■指導の方針

小学校及び義務教育学校（前期課程）

質問紙調査では「国語の授業の内容はよく分かる」と回答した児童が8割近くいる一方で、学力調査の平均正答率が全国を大きく下回っています。特に、「読むこと」について課題がみられました。一方、対話的な学びの充実を図った授業改善の成果は見られています。今後の授業改善の中で、「読むこと」に関する指導を充実させる、読書など文章を読む活動を啓発することで多くの文章に触れる機会を意図的に設ける、などの工夫を取り入れていくことが必要だと考えます。

中学校及び義務教育学校（後期課程）

質問紙調査では学級活動や道徳の授業において「話し合いを通して学級をよりよくしたり、自分が努力すべきことを決めたりすることができる」と回答した生徒が全国平均を上回っています。このような対話的な学びが国語の授業でも生かされていることが、話し合いの場面を扱った問題場面の正答率が高かったことにつながった分析します。「書くこと」に弱さが見られたため、自分の考えを文章で表現することを大切にした学びを充実させていくことが必要だと考えます。

令和 8 年度【算数・数学】

■小学校及び義務教育学校（前期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均を下回っている。
- ・「単位量あたりの大きさを求める除法の式の意味」や「小数が整数と同じ十進位取り記数法の仕組みで表されていることを理解」の設問は、他の設問よりも比較的正答率が高い。
- ・「整数と小数の減法の計算をすることができるかどうか」や「百分率で表された割合と比較量から、基準量を求めることができるかどうか」をみる設問では、全国平均を大きく下回っている。
⇒問題の意味を理解し、立式することができるが、計算する段階での誤答が多かったのではないかと考える。立式の根拠を明らかにしたり、立式の方法を考えたりする授業を丁寧に行っていたという反面、正しく計算することができるようにするための時間確保も必要である。
- ・自分の考えを言葉を用いて記述する問題にも弱さが見られた。
⇒求め方を言葉で説明するだけでなく、記述した上で説明するなどといったアウトプットの方法を工夫した学習活動の充実が必要である。

■中学校及び義務教育学校（後期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・羽島市の全問題に対する平均正答率は、全国平均を上回っている。
- ・「図形領域」に関わる設問で、平均正答率が高い。
- ・「同類項の意味の理解」や「反比例の表を用いて y の値を計算する」設問の正答率が全国平均よりも高い。
- ・「データの活用領域」に関わる設問に課題がみられる。特に、「起こり得る場合を整理し、確率を求めることができるかどうかをみる」や「累積度数の意味を理解しているかどうかをみる」設問の正答率が低い学校がある。
⇒不確実な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに弱さがあるため、累積度数などの数学の用語の意味理解を進めるための指導や、それらを用いて傾向を説明するような学習活動を充実させる必要がある。

■指導の方針

小学校及び義務教育学校（前期課程）

質問紙調査では、「算数が得意」と回答した児童は 6 割を下回っています。一方で、「学習を普段の生活の中で活用している」「あきらめずにいろいろな解き方を考える」と回答した割合は 8 割を上回っています。算数の授業と生活とをつなぎ、苦手でも主体的に学習に向かうことができるような授業改善の成果が表れています。数の意味を理解したり、問題文から正しく立式したりすることができる一方で、正しく計算したり、解の求め方を記述で説明したりする力に課題が見られます。練習問題に取り組む時間や、一人一人が考えを記述で表現したりする時間の確保が必要だと考えます。

中学校及び義務教育学校（後期課程）

学力調査では、多くの学校で全国平均を上回りました。日々の授業改善の成果の表れです。一方で、「データの活用領域」に課題がみられる学校もありました。

このことから、特に「データの活用領域」で、単元を通して、数学の用語を用いて理解を深める指導を行い、多様な問題で数学的な根拠に基づいて過程や結果を説明したり、説明の根拠としなかった理由をあえて問うたりするなど、筋道立てて説明する活動の工夫が必要だと考えます。

令和 8 年度【英語】

■中学校及び義務教育学校（後期課程）

◎全国の平均正答率との比較より

- ・4技能の合計では、ほぼ全国平均並みの正答率であった。

○聞くこと

- ・日常的な話題を聞いて概要を捉える設問については、全国平均よりも高い正答率だった。
 - ・音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかをみる設問に課題が見られた。
- ⇒会話や状況の全体を捉えることはできるが、一語一語を正しく正確に聞き取ることに弱さが見られるため、音声を英語で表記し正確に理解することができるような指導が必要である。

○読むこと

- ・社会的な話題について、短い文章を読み、要点を捉えることができるかどうかをみる設問では、全国平均よりも高い正答率だった。
 - ・日常的な話題について、目的に応じて、必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる設問に課題が見られた。
- ⇒聞くこと同様、文章から大まかな概要を捉えることができるが、目的に応じて正しく読み取るときに課題があるため、語彙力を高める指導を充実させ、単語を正確に理解する必要がある。

○書くこと

- ・知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかをみる設問では、全国平均よりも高い正答率だった。
 - ・自分の考えや気持ちを整理し、まとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる設問に課題が見られた。
- ⇒コミュニケーション能力の向上を目指した授業改善の成果は見られるものの、語彙力の低さが課題であるため、学習活動のすみ分けを行っていく必要がある。

○話すこと

- ・日常的な話題について、事実や自分の考え、気持などを整理し、まとまりのある内容を話すことができるかをみる設問が複数あったが、留学生とのコミュニケーション場面での正答率の高いものの、自分の考えや気持ちを発表する場面での正答率は低かった。
- ⇒書くこと同様、コミュニケーション場面での活用力の高さが見られた。一方、回答類型を分析すると、自分の好きなことやしたいことを話すことはできるが、その理由を説明することに弱さが見られる。コミュニケーションを図る際に、単語で答えるだけでなく、正しい文法で理由も含めて話すことができるようにしていく必要がある。

■指導の方針

中学校及び義務教育学校（後期課程）

学力調査の平均 IRT スコアはほぼ全国平均並みで、5段階別 IRT バンド別分布からは、英語が苦手な生徒の割合が低く、全国よりも二極化は進んでいないことが分かりました。質問紙でも、「英語が得意」「英語の授業がよく分かる」と回答した生徒の割合が全国平均よりも高かったです。また、4技能の各設問に対する正答率を見ても、コミュニケーション場面での設問の正答率が高く、日々の授業において、話すことに重きを置いた言語活動の充実を図った授業改善の成果が見られました。一方、基本的な知識・技能に関わる語彙力の低さが見られ、コミュニケーションを大切にしたい授業と、語彙力を身に付ける授業とのすみ分けを行い、文法や言語の知識を高める授業の充実も図っていく必要があると考えます。